

氏 名 根津 朝彦

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大甲第 1310 号

学位授与の日付 平成 22 年 3 月 24 日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本歴史研究専攻  
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 戦後「論壇」における『中央公論』のジャーナリズム史  
研究—「風流夢譚」事件と編集者の思想を中心に—

論文審査委員 主 査 教授 安田 常雄  
准教授 樋口 雄彦  
教授 久留島 浩  
教授 有山 輝雄（東京経済大学）  
教授 荒川 章二（静岡大学）

## 論文内容の要旨

戦後日本において総合雑誌を中心とする「論壇」とは何だったのか。本研究は『中央公論』の誌面研究と編集者の群像を通して戦後ジャーナリズム史上の「論壇」と総合雑誌の位置づけを解明することを課題とする。その際、中央公論社と「論壇」に激震を走らせた「風流夢譚」事件に着目する。同事件は、深沢七郎が『中央公論』1960年12月号に発表した小説「風流夢譚」に端を発する言論テロである。1961年、同小説中の天皇一家処刑の場面に憤激した右翼少年が中央公論社社長宅で起こした殺傷事件（嶋中事件）と同年同社が自主規制した『思想の科学』天皇制特集号廃棄事件の連鎖が以後の天皇制批判をタブー化した。

知識人の影響力が最盛を迎える安保闘争の後に、なぜ「論壇」が急激な変容を見せたのか。本研究は知識人に比べて従来注目されなかった編集者に焦点を当て、編集者への聞き取り調査と、総合雑誌や全国紙の論壇時評をはじめとするジャーナリズム史に関する資料を用いて、時期ごとの特徴を押さえながら戦後「論壇」に果たした『中央公論』と編集者独自の役割を明らかにする。

本論の構成は、まず戦後「論壇」の全体像を提示する（一章）。次にその「論壇」において『中央公論』を特徴づける主要論文の分析を行う（二章）。そして本論で中心対象にした「風流夢譚」事件（三章）と総合雑誌編集者の役割（四章）を検討する。全体的な意義は4点に整理することができる。第一に、戦後ジャーナリズムそのものの長期に及ぶ再検証を行うこと。第二に、天皇制批判を中心とした「言論の自由」が発揮ないし崩壊する際の編集者の状況とジャーナリズムの構造的な条件の探究。第三に、その中で『中央公論』が独自に果たした役割の分析。第四に、総合雑誌編集者の役割の解明と、編集者と知識人の相互作用と協業関係の考察である。

一章では、新聞と総合雑誌の結節点である論壇時評の分析を通して「論壇」の見取図を確定し、どのような知識人が評者に登用され、何が代表的な論文と見なされたのかを明らかにした。戦後は『世界』『中央公論』『文藝春秋』の3誌が総合雑誌の中心と見なされたが、占領期の時点で『文藝春秋』と『世界』はその雑誌としての特徴を明瞭にする。『文藝春秋』は「国民雑誌」を標榜し、レッド・ページ期に部数を急増させながら小泉信三を主要な執筆者に据え、『世界』は講和問題特集号でアイデンティティを確立した。論壇時評は1957年頃から『朝日新聞』『毎日新聞』『読売新聞』で定式化し、それまで多様な執筆者を登用していた『読売』は57年12月以降、保守的な時評者で一貫し、田中美知太郎がそれを代表した。嶋中事件以後は、『中央公論』が大きく論調を変容させることで、『世界』の孤立が前景化する。そして1970年において学生運動の終息、総選挙の社会党の敗北、万博に代表される経済的繁栄の謳歌、70年安保の不燃焼と誰の目にも「論壇」の凋落は明らかとなり、「論壇」は一つの終焉を迎える。

二章では、一章の論壇時評で注目された『中央公論』の代表的な論文を押さえながら同誌の論調を具体的に明らかにした。嶋中事件前は天皇制批判とルポルタージュ、事件後は「現実主義」論調に大きな特色があった。『世界』は天皇制批判に抑制的であり、「ミッチー・ブーム」を黙殺したことはその象徴である。対して『中央公論』は高倉テル、大山郁夫、山川均、松下圭一、井上清、佐藤忠男らによる批判的な論文が多く掲載された。アカデミズムに依拠した『世界』と比べて、ルポルタージュの面でも『中央公論』は精彩を放つ。その系譜は、高見順、広津和郎の松川裁判批判、堀田善衛といった作家たちの仕事に淵源があり、50年代後半の藤島宇内・丸山邦男・村上兵衛の計8本の共同ルポに『中央公論』のジャーナリズム誌としての在り方が示された。嶋中事件後には高

坂正堯、衛藤瀋吉、永井陽之助を中心とした「現実主義」論調が同誌を席卷していく様子を、粕谷一希との関係性を含めて論じ、「現実主義」と「理想主義」の対話可能性について考察した。最後に『中央公論』1964年10月号に掲載された特集「戦後日本を創った代表論文」に引きつけながら、総合雑誌と「論壇」に関する小括を行った。

三章では、戦後ジャーナリズムと中央公論社双方にとっての「風流夢譚」事件のインパクトを明らかにした。具体的には、「風流夢譚」掲載の経緯、同小説の内容、嶋中事件が与えた畏怖と対抗言説、『思想の科学』事件によって生じた執筆拒否問題、1968年年末に生じた中央公論社労働組合の闘争を中心に論じた。そこに示されたのは、中央公論社の度重なる後退、総敗北の歴史であり、知識人側の自主規制と対置した時、その差は歴然とする。しかしながら知識人側においても事件の本質となった天皇制の問題と「風流夢譚」の作品論に向き合えなかったことが、天皇制批判のタブー化を形成する素地となった。しかし相次ぐ事件にもかかわらず、同社は高度成長を背景とし、社業隆盛を迎える。その中で従来の『中央公論』『婦人公論』という二大柱を軸とする雑誌主体の経営から、『世界の歴史』を皮切りとした全集販売を主軸とした体制へと舵をきり、縁故採用で営業部等を拡充し出版企業として変貌していくのである。

四章では、『中央公論』の編集者の在り様を通して、総合雑誌の編集者独自の思想と役割を明らかにした。具体的には『中央公論』の編集長を中心にその思想を追っていく。敗戦直後の『中央公論』を支えた畑中繁雄が戦犯問題の混乱の中で責任をとって退社し、編集権は会社・社長側にあるとした山本英吉に編集長が交代する時期が一つの分岐点となる。それから2人の「戦中派」編集長、嶋中鵬二と竹森清が戦後『中央公論』の特色と評価を決定づけ、「風流夢譚」事件の混乱で動揺する中、粕谷一希が以後の『中央公論』を主導した。そこでは会社による人事採用と編集者の配置が、「言論の自由」の実質を担保できるかどうかにかかり知れない影響を与えたことが示される。

結論では、一章で主に分析した戦後ジャーナリズム史の長期的な分析と、三章で論じた「言論の自由」を支える構造をまとめ直し、元『中央公論』の編集者であり、同誌を追われ後に『世界』編集長となった海老原光義が、嶋中事件で『世界』に特集を組んだ意味を問い、外部に対し問題をオープンにできなかった『中央公論』の歴史的な分岐を位置づけた。無論、『中央公論』が発揮した意義は、嶋中事件における対応の誤りで全てを流し去ることはできない。清水英夫が提起する『中央公論』文化と『世界』文化に着目し、1950年代後半に顕著だったように、『中央公論』が果たした役割には、多くの新しい執筆者の抜擢、資料主義、ルポルタージュ掲載等に大きな意義があったことを確認した。その上で、清水幾太郎が総合雑誌に新聞（メディア）批判の役割を見出したように、重要なのは総合雑誌同士の僚誌的な連携の形成にあることを主張し、その事例を50年代前半に存在した『世界』『中央公論』『改造』の関係に求めた。最後に執筆者を社会的発言者として知識人化させる総合雑誌編集者の役割を考察した。その役割は個々の編集者がすごした学生時代やジャーナリズムとの接触によって形成された資質を抜きに考えられず、総合雑誌編集者がもつ組織者としての側面と精神の自発性に関与する創造的機能の重要性を提起した。

## 博士論文の審査結果の要旨

### 1 本論文の独自性

- (1) 第1章は、1945～1972年までの主要3紙の論壇時評の歴史的推移を跡づけ、その見取り図を提出している。膨大な資料を丹念に収集し、事実関係を整理すること自体、極めて大きな作業であり、その意味でこれまで誰も手をつけなかった領域に踏み込んだ意義は大きい。この章は、論文全体の位置づけとしては、後の『中央公論』分析の前提となるものであり、全体の俯瞰を冒頭に置く構成は周到な設定といえよう。戦後論壇史を『世界』『文藝春秋』を両極としてみる見解は存在するが、その中間項として『中央公論』を挿入することによって、単純な保革二極構造（一種の冷戦思考）を超えるパースペクティブを示した点は独自性を持つ。
- (2) 第2章は、第1章の論壇時評で注目された『中央公論』の代表的論文の歴史的推移とその特徴を抽出している。全体の論調の変化としては、嶋中事件以前を天皇制批判とルポルタージュ、事件後を「現実主義」と特徴づけている。嶋中事件をはさんでその前後を天皇制批判と「現実主義」論調とする見方は一つの常識にすぎないが、ルポルタージュの意義に注目した点は本論文の独自性である。またルポルタージュという記録性がジャーナリズムの重要な機能として捉え直され、まだ十分な論理的・思想史考察に至っていないが、ジャーナリズム史研究、日本現代史研究に問題を提起した意義は大きい。同時に「現実主義」論調については、周到な整理を通してその内容を再確認し、同時代の評価を超えて「現実主義」と「理想主義」の「対話可能性」を模索しようとしている点がユニークである。また十分な説得力をもって提示するには至っていないが、この点を萩原延寿で見ようとする点も正当である。資料的には、PR誌『書店はんじょう』、社内報『中公社報』、『社内だより』などの一次資料の活用とともに、本論文全体の大きな独自性である「聞き書き」が有効に使われており、戦後のそれぞれの時代における証言に裏打ちされている。ここであげられている証言そのものが戦後史研究に寄与するものは大きい。
- (3) 第3章は、いわゆる「風流夢譚」事件の経緯、小説の内容、嶋中事件の恐怖と対抗言説、執筆拒否問題、中公労組闘争などについて、編集部や知識人をめぐる行動の詳細な分析である。この事件については、すでに京谷秀夫・中村智子の先行研究（記録）があるが、これを下敷きにしながら、同時代の資料と「聞き書き」によって企業内部の職務関係、関係者の心理、疑念と猜疑などを含めて、いわばドキュメンタリー風に再構成した点は、本論文の最も大きな独自の成果である。また分析視角としては、中央公論社の「総敗北」と知識人の「自主規制」という二つの視点を設定し、その相互関係でこの事件を分析する視角は新しいものであり、特に後者の内容を「天皇制問題」の回避と作品論の欠如に求めている点は、今後一つの争点を形成する可能性があるが、本論文のユニークな視点と思われる。
- (4) 第4章は、戦後の各時期における『中央公論』編集長を軸に、編集者の思想を辿った章であり、本論文の特徴とスタイルが最もよく示されている。ここでも「聞き書き」が実に効果的に使われている。旧来の学術論文スタイルとは違う戦後史叙述の試みというべきかもしれない。各編集者の戦中体験と戦後の思想との関係に関心が払われ、その接点を軸に構成しようとしている点は正当な問題意識である。それと深い関係をもつ「世代」概念を組み込もうとしている点もユニークである。
- (5) 結論では、これまでの分析を総括し、特に「総合雑誌同士の僚誌的な連携」の可能性を提示しようとしている点が、本論文の特徴をよく示している。

(6) 以上をまとめると、本論文は、戦後ジャーナリズム史と戦後思想史を架橋する方法的意味をもち、これまでほとんど試みられなかった斬新な視角を有する。具体的には、「編集者の思想」に注目するという新しい視点から、『中央公論』はいうまでもなく、同時代の主要な編集者への精力的な聞き書きを積み重ね、その「編集者の思想」がそれぞれの時期の主要論文・企画とどのように内在的にスパークしたかを描き出そうとしている。この試みは、これまでややもすると著名な知識人の論文言説の表層のみをたどってきた戦後思想史に、論文生産の現場から反省を迫る意味をもち、より深い地層から戦後思想史あるいは戦後史を再考する手がかりをあたえてくれるのではないかと期待される。こうした新鮮な視角からの文献博搜力とその解説、および広範な聞き書きの積み重ねなどが、本論文の大きな特徴である。

## 2 本論文の問題点

全体として、戦後思想史の中での問題の掘り下げが必ずしも十分ではないこと、戦後ジャーナリズム史と現代史との方法的な共通性と異質性が不明確なこと、聞き書きの対象者の見解に引きずられる傾向、中公労組との関わりが表面的な検討に終わっていることなどがあげられる。技術的な点では、同一の記述がさまざまな箇所でも重複していることなど、構成の細部を点検するとともに、小見出しを付けて、記述の狙いを明確にするなどの工夫も必要である。

## 3 結論

上記のような問題点が残るものの、総体として本論文の独自性と研究上の意義は極めて高いものであると評価される。よって本審査委員会は提出された論文が学位論文にふさわしいものであることを全員一致で認めた。